

破滅の拒絶—ドイツ統帥部とソ連における攻勢の失敗 1941年秋—

ジェファリー・P・メガーギー

1941年8月11日、ドイツ国防軍参謀総長のフランツ・ハルダー上級大将は、その時点までのソビエト連邦における戦役の印象を次のように記録した。

全体の状況から見て、我々がロシアの巨大さを過小評価していたことが次第に明らかになっている。ロシアは、まさしく全体主義国家の特徴である徹底した断固たる決意をもって常に戦争に備えていた。(中略) 開戦時点で、我々は敵の総兵力を約200個師団と見積もっていたが、現在すでに360個師団を数えている。これらの新たに計上された師団は、我が軍の基準に照らせば武装も装備も整っておらず、多くの場合、戦術指揮能力も乏しいのは確かである。しかし、何はともあれそうした新たな師団は現実存在し、我々がその十数個を粉砕するたびに、ロシア軍は更に新十数個師団を投入してくるのである¹。

ハルダーはドイツ国防軍がソ連侵攻を開始してからわずか7週間、そして自身が事実上の勝利を宣言してから5週間後の時点で初めて不安の兆候を見せ始めた。しかしながら、ハルダーはそのような不安に流されることを拒絶し、ドイツ人生来の優越性と国防軍の高い軍事的専門性が、軍事能力に欠け、人間として劣等な共産主義の敵との闘争を制するという確信にしがみついた。ドイツ統帥部の同僚たちと同様に彼もまた、侵攻作戦が翌1942年にまでずれ込むことが避けられなくなった後でさえ、自らの基本的な姿勢と想定を露ほども疑わなかったと見える²。

対ソ戦の長期化に対するドイツ軍指導部の反応を理解するには、まず開戦時点でのドイツの意図と期待値を検証する必要がある。そこには、軍事的な自信過剰と人種差別に基づ

1 Franz Halder, *Kriegstagebuch. Tägliche Aufzeichnungen des Chefs des Generalstabes des Heeres 1939-1942*, ed. Arbeitskreis für Wehrforschung, Stuttgart (Stuttgart: Kohlhammer, 1962), 3:170. Transl. Geoffrey Megargee. 以下、「Halder KTB」と記す。

2 本稿において「統帥部」とは、アドルフ・ヒトラー、ならびに国防軍最高司令部 (*Oberkommando der Wehrmacht*, OKW)、特に国防軍作戦部 (*Wehrmachtführungsstab*)、および陸軍統帥部 (*Oberkommando des Heeres*, OKH)、特に陸軍総司令部 (*Generalstab des Heeres*)内の重要人物を指す。海軍および空軍の統帥部は、本稿で述べる経緯においては補佐的な役割しか果たしていない。また、OKHは東部前線において全面的な作戦統制を行った一方、OKWはその他の戦域において臨時的な作戦本部として指揮をとったことにも留意すべきである。次を参照。Geoffrey P. Megargee, *Inside Hitler's High Command* (Lawrence: Univ. Press of Kansas, 2000)。

く傲慢さが入り混じっていた。戦略レベルでは、アドルフ・ヒトラーが意思決定をしていたが、配下の将校らはそれに大筋で合意していた。将校らの大半はソ連を長期的な存続に関わる脅威であり、ナチスドイツの「アリア人種国家」と根本的に対立する「ユダヤ共産主義」体制とみなしていた。それと同時に、ソビエト体制は根本的に脆弱で、いわば粘土の足を持つ（動きが緩慢な）巨人であり、内部分裂に引き裂かれ、狡猾だが究極的に劣等なユダヤ人が率いる劣等人種（Untermenschen）のスラブ人という野蛮人の群れに過ぎないと考えていた。効果的な一撃をもってすれば、腐った組織全体が崩れ落ちるというのが将官らの見解であった。その一撃により、ドニエプル川とドビナ川の西側にいるソ連軍部隊を撃破し得ると考えたのである。ドイツ国防軍の情報見積は、ソ連がその損害を補う戦略予備を持たないと評価していたため、赤軍が敗北し、無能な政府が無秩序状態に陥れば、戦役の残りは、ドイツが必要とする資源を獲得するとともに、ソ連の国家再建を防ぐのに必要だと考えられるだけのソ連領を占領するだけであると信じられていた。

作戦計画には三つの前進軸が示され、レニングラード、モスクワ、ウクライナのドネツ川盆地が当初の目標であった。作戦的成功へのカギは、ドイツ軍の装甲・自動車化師団が迅速に前進してソ連の防御を突破し、敵軍部隊が内陸まで退却して戦闘が延々と引き延ばされる状況になる前に、敵軍を攪乱し、包囲し、壊滅させることであった。ドイツ軍将官は、この任務が大きな困難を呈することになるとは予想していなかった。赤軍に近代的な機動戦を遂行する能力はなく、したがって反撃も防戦しながらの撤退もできないと踏んでいたのである。ソ連の最高指導者ヨシフ・スターリンがかつて数年にわたる大粛清により何万人という軍高官を解任、投獄、殺害し、残っている者の大部分は軍事のプロというより雇われ政治屋に過ぎないことを、ドイツ軍将官らは知っていた。1939年のポーランド侵攻でも、翌1940年のフィンランドへの最初の攻撃でも、赤軍は著しくプロ意識に欠けることが明らかになっていた（ただし、その過ちから学び、最終的にはフィンランド軍を打ち破ったソ連軍高官らの順応力をドイツ側は見落としていた）。また、ドイツ軍将校らは、フランスでの戦役において大陸最強といわれるフランス軍をもの数週間で撃退し、イギリス軍を本国に追い返したことも頭に残っていた。こうしたことをすべて考慮した結果、将校らは今回の作戦は容易であろうと確信した。途中3週間の補給期間も含めて、11週間から14週間で終わるだろうと見積もっていた。

今になって振り返れば、ドイツ軍の計画に欠陥があったのは明らかである。第一に最も重要なこととして、ソビエト体制は最初の軍事的敗北の後に崩壊するという中核となる戦略的想定には疑問の余地がある。確かに当時の時点では、全体主義体制の持つ国力のすべてと回復力が全面戦争の状況において試されたことはなかった。しかし、ナチス体制に仕える高官がなぜ、スターリンの国にそのような弱みがあると想定したのかという疑問が残る。

唯一これを説明できるのは、ドイツ人の人種差別意識であろう。作戦行動の遂行に関するドイツ軍の想定については、重症の「戦勝病」が、情報部門が抱えていた深刻な問題と相まって作用していたと推量できる。ドイツはソ連の軍事能力を著しく過小評価していた。質的な面では、確かに赤軍はドイツ国防軍に匹敵しなかったが、その規模と配置がやがて問題を引き起こすことになる。ドイツは赤軍の兵力は200万人と確信していたが、侵攻が開始された6月22日の時点で、実際の数はずでに500万人を超えていた。さらに、ドイツ軍は西部軍管区の赤軍部隊数を3割から5割多く見積もっていた³。したがって、ドイツ国防軍は前線近くにおいて赤軍の大部分を捕捉して撃破することはそもそも、できないことであった。モスクワより西の地域での決定的な軍事的勝利は、確実とはとても言えなかったのである。

ドイツ国防軍は、兵站と人的戦力の面でも非常に困難な問題に直面した。侵攻部隊の兵力は300万人（および同盟国の兵力50万人）、車両60万台、軍馬62万5,000頭であった。目標地点は出発点から1,000キロから1,500キロの地点にあった。ソ連国内の道路は極めて劣悪で、鉄道は線路の軌間が独ソ間で異なった。ドイツ軍は主にトラックを使用した便宜的な策に頼ってこうした困難を克服しようとした。さらに、人員の補充および装備や軍用品の補給は、将官らが自信をもって予測した「短期」の作戦行動にしろうじて足りる程度しか用意がなかった。国防軍はこの作戦をギリギリの状態で行うようとしていた。定められた期間内に目標を達成できなければ、深刻な事態に陥るのは自明であった⁴。

ドイツの作戦計画には、もう一つ注目すべき要素がある。1941年3月30日、ヒトラーはソ連侵攻作戦「バルバロッサ作戦」の主要な指揮官と参謀将校に向けて演説し、これは絶滅戦争であり、人種戦争だと言明した。したがって通常の規則は適用されないため、ソ連兵を同志として遇してはならず、共産党のコミッサール（人民委員）やインテリゲンツィア（知識人）は抹殺しなければならないと述べたのである。ヒトラーは軍首脳部に、戦争に関する規範や国際法に違反するように求めたわけであるが、当時の史料に将官らの側が抵抗し

³ David Thomas, "Foreign Armies East and German Military Intelligence in Russia, 1941-1945," *Journal of Contemporary History* 22 (1987), 277-278; David M. Glantz, *Stumbling Colossus: The Red Army on the Eve of World War* (Lawrence: University Press of Kansas, 1998), 9-11; Glantz, *When Titans Clashed: How the Red Army Stopped Hitler* (Lawrence: University Press of Kansas, 1995), 33. このような重大な計算ミスは、ドイツ軍参謀組織内の体制の問題と、ソ連国内での情報収集の困難さから生じた。

⁴ 上述の出典と並び、次も参照。Martin van Creveld, *Supplying War: Logistics from Wallenstein to Patton* (Cambridge, New York: Cambridge University Press, 1977), chap. 7, and Richard L. DiNardo, *Mechanized Juggernaut or Military Anachronism? Horses and the German Army of WWII* (Mechanicsburg, Penn.: Stackpole, 1991), chap. 3. ドイツ軍兵力に関する数値はドイツ軍事史研究所の次の資料による。Militärgeschichtliches Forschungsamt, *Germany and the Second World War* (New York: Oxford University Press, 1990-2006), 4:318.

たことを示唆するものはない⁵。それどころか、最高司令官のヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ元帥はすでに3月27日の時点で、各部隊は「この戦闘は異なる人種間で行われることを認識し、それ相応の厳しさをもって進めなければならない」と上級司令官らに伝えていた⁶。

フォン・ブラウヒッチュの指令は、軍、親衛隊、その他の国家当局が共有する目標や価値観が、銃後の戦争計画を形作っていたことを示している。陸軍は明らかにこの戦役でできる限り短期間で勝利したかった。また、自軍の兵站組織には十分な補給物資が無いことは分かっていたから、部隊および物資を移動する自由を確保するとともに食料を始めとする資源を獲得するため、占領を予定する広大な領域の支配権を握りたいとも考えていた。このほか、陸軍と食糧省は第一次世界大戦時に国民の士気低下につながった類の苦難を招くことがないように、市民に食糧が届くようにしたいとも考えていた。「東部経済部」と呼ばれる組織が収用活動の範囲を広げようとする一方、親衛隊はドイツによる占領地域の植民地化を計画した。これらの機関はすべて、ユダヤ人と共産主義者の抹殺という願望を共有していたのに加え、東方に居住する他国民の命に全く無関心であることも共通していた。いわゆる「軍事的必要性」がイデオロギー上の原則や根深い偏見と完璧に符合していたために、ナチ党員を自認していない軍人でさえ、党の目標に向かって動くことができたのである⁷。ドイツの計画は、征服された土地に住むあらゆる人々にとって悲惨な結果を招くこととなる。ひいては、ドイツ自体にも深刻な戦略上の帰結をもたらすことになった。

バルバロッサ作戦は6月22日に開始され、初めの数週間は概ねドイツの思惑通りに進んでいるかに見えた。作戦のほぼ開始時からドイツは航空優勢を確立し、地上部隊は特に北方および中央区域において、ソ連軍後方にまで速やかに縦深突破した。ソ連軍も奮戦し、可能な限り反撃を仕掛けたものの、連携を欠いた弱いものに留まり、ドイツ軍はその大部分を難なく退けた。中央区域だけで、赤軍兵の戦死者と捕虜は40万人を超え、7月1日までに何千台もの戦車や火砲がドイツ軍によって破壊または押収された。7月3日、ハルダーは日記に次のように記している。

5 ドイツ軍集団と陸軍司令官たちの意識に関する最も詳細な分析については、次を参照（ドイツ語版のみ）。Johannes Hürter, *Hitlers Heerführer. Die deutschen Oberbefehlshaber im Krieg gegen die Sowjetunion 1941/42* (Munich: Oldenbourg, 2007)。この会合における司令官らの関与について、9～12ページに論じられている。1941年3月30日会合については、Halder KTB, 2:335-337を参照。ハルダーは戦後、日記に大幅に手を入れていることに留意されたい。

6 Jürgen Förster, "Operation Barbarossa as a War of Conquest and Annihilation," in *Germany and the Second World War*, 4:485.

7 ドイツの占領政策策定の詳細については、次を参照。Förster, "Operation Barbarossa as a War of Conquest and Annihilation."

総じて、ドビナ川とドニエプル川より我方側に所在していたロシア軍の大部分を壊滅させるとの任務は達成されたと言える。(中略)ドビナ川とドニエプル川の東側で遭遇するのは、残敵に過ぎないことは疑いない。(中略)したがって、対ロシア作戦は14日以内に勝利したと言っても過言ではなかろう。むしろ、まだ終わってはいない。領域の広さとあらゆる手段で遂行されている抵抗の頑強さを考えれば、我が軍はまだ何週間も多忙な日々が続くであろう⁸。

同日、当時ハルダーの次級者であったフリードリヒ・パウルス中将(後にスターリングラードでソ連軍に降伏するという不名誉を背負った)は、参謀本部の各部宛てにバルバロッサ作戦に続く作戦行動の下準備となる覚書を発出した⁹。翌7月4日、ヒトラーは「事実上、ロシア人は戦争に負けた」と述べ、フォン・ブラウヒッチュと国防軍統帥部の軍参謀本部長アルフレート・ヨードル少将に、戦役終了後に陸軍がとるべき態勢の立案を命じた¹⁰。ハルダーは7月23日、陸軍はあと1カ月後にはレニングラードとモスクワに入り10月初めにはボルガ川に達し、その1カ月後にはコーカサス油田地域のバクーとバトゥミに入ると予測した¹¹。

とはいえ、ドイツにとってすべてが順調だったわけではなく、ハルダーの現状に満足し切った様子は理解し難い。徒歩で行軍する大多数の部隊は、比較的小規模で機動性のある先頭の部隊に追従できなかった。輸送状況は予想以上に劣悪で、稼働している輸送車両の数は初めの1カ月だけで25～30%も減少した。軍馬も消耗しつつあり、補充も不十分であった。7月後半には各部隊が燃料や弾薬の不足を訴え始め、人的損失も計画立案者の予想を超えて深刻さを増していた。8月3日には、死傷者総数は17万9,500人とハルダーは記録している¹²。このペースでは、ドイツ国防軍はすぐにも補充要員を使い果たしてしまうことになる。かかる状況は、ソ連の軍事的、政治的な終焉は目前だと確信できる者でなければ、憂慮して当然の状況であったはずである。しかし、そのような終焉は差し迫ってなどいなかったのが不愉快な事実であった。ドイツ軍の戦役は、予想では本格的な戦闘が終わる時点に達していたが、ソ連は降伏を拒み、まるで奇跡のような動員と再編成を敢行していた。7月1日までに530万人という驚くべき数の追加要員を召集し、8月1日までには144個師団からなる17個の野戦軍を新たに編成していた。ソ連軍の兵力は、6月22日以降

8 Halder KTB, 3:38-39.

9 Oberquartiermeister I des Generalstabes des Heeres Nr. 430/41 g.Kdos. Chefs., 3.7.41: Vorbereitung der Operationen für die Zeit nach Barbarossa, in BArch RH2/1520, 217.

10 Walter Warlimont, *Im Hauptquartier der deutschen Wehrmacht 1939-1945: Grundlagen, Formen, Gestalten* (Frankfurt am Main: Bernard & Graefe, 1962), 194-95.

11 Halder KTB, 3:170.

12 Halder KTB, 3:145.

に46個師団を失っていたにもかかわらず、この時点で401個師団に上った¹³。

8月になると、統帥部の意識の中にも初めて疑念がうかがえるようになるが、不明瞭で矛盾を含むものに留まっていた。上述の通り、ハルダーは8月11日に、ソ連には新たな部隊を無限に補充する必要があるようだ」と記しているが、このような一時的な不安の表出は、ハルダーの態度に特徴的なものではなかった。一方、他の将校らは楽観を失いつつあった。国防軍統帥部内では、8月6日にヨードルの次級者であったヴァルター・ヴァーリモント大佐が、「東部作戦行動後の戦争継続に関する戦略的概観」と題する文書を提出した。その中でヴァーリモントは、国防軍が1941年の内に作戦目標、すなわちコーカサスの油田地域からボルガ川、さらにアルハンゲリスクとムルマンスクを結ぶラインに達することはなく、したがって流動的な戦況の前線は存在し続けるという事実をドイツ軍指導部は考慮すべきだと書かれている¹⁴。この文書は後に9月1日付でヒトラーが承認した、より広範な戦略評価の基礎となった。この評価には、冒頭の「統帥部がかねてより計算していた通り〔これは疑問であるが〕、1941年の東部作戦行動がソビエト・ロシアの抵抗力の完全な破壊につながらないとすれば……」との記述に続き、ソ連の打倒を1942年の最優先事項に設定している¹⁵。したがって、戦略当局の首脳は、ドイツ軍が一年の作戦ではソ連軍を打倒できない可能性を少なくとも受け入れつつあった。しかしながら、ハルダーはこの評価に全く同意しておらず、野戦指揮官らも年末までにソ連軍を撃退できるとなおも信じていたようである。

8月初旬には、ドイツ統帥部は、この戦役をいかにして終結させるかをめぐり、何カ月も解決を持ち越されてきた対立への対処も迫られていた。ハルダーと他の将校らは、ソ連はモスクワを守るためなら持てるすべてを戦闘に投入し、結果的にそのすべてを失うとの確信のもと、モスクワを攻撃することを望んだ。一方ヒトラーは、レニングラードとウクライナの獲得の方に戦略的な価値を見出していた。最終的に、総統であるヒトラーの意向が将校らを押し切った。以後、最初の成果は鮮やかな勝利であった。8月25日に中央軍集団の部隊が南方に切り込み、1カ月のうちにキエフを包囲し、60万人以上のソ連兵を捕虜にしたのである。新たに沸き上がった楽観がドイツ軍司令部に広がった。陸軍主計総監のエドゥアルト・ヴァグナー少将は、10月5日に次のように述べている。

¹³ Glantz, *Stumbling Colossus*, 15. See also Glantz, *Colossus Reborn: The Red Army at War, 1941-1943* (Lawrence: Univ. Press of Kansas, 2005).

¹⁴ Landesverteidigung-Chef Nr. 441339/41 g.K.Ch., 6.8.1941: Kurzer strategischer Überblick über die Fortführung des Krieges nach dem Ostfeldzug, in BArch RM 7/258, 6.

¹⁵ “Die strategische Lage im Spätsommer 1941 als Grundlage für die weiteren politischen und militärischen Absichten.” Doc. 265. Germany, Auswärtigen Amt, *Akten zur deutschen auswärtigen Politik 1918-1945*, Serie D, Band XIII.1 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1970), 346-353.

最後の崩壊が目前に迫っている。(中略) 作戦目標は決まったが、以前なら髪が逆立つほどぞっとしていただろう。モスクワの東方だ! そこまでいけば、戦争はほとんど終わると考えられるし、もしかすると本当に[ソビエト]体制の崩壊が起きるかもしれない。(中略) 総統の軍事的判断にはいつも驚かされる。作戦の最中に決然ともいえる態度で介入し、現在まで常に正しい行動をとってきた。南方で大成功を収めることが総統の解決策である¹⁶。

翼側における行動がヒトラーの満足の行く形で完了したことにより、関心は中央の作戦軸とモスクワに戻った。9月上旬、モスクワ包囲に向けた新たな攻勢作戦「タイフーン作戦」の立案が始まった。紙の上では両軍とも強力に見えたが、実際には両者ともパンチドランカーのボクサー同然でほぼ憔悴し、相手の方が先に棄権してくれるようお願いながら何とか踏みとどまっている状態であった。強いて違いを挙げるなら、ソ連には他に選択肢がなく、さらに奥地へ後退するにつれて自らの兵站源の方向に押し込まれつつあった。一方ドイツ側は、冬の始まりに備えて必要になる衣服や物資よりも、燃料と弾薬の前線への補給に全力を挙げなければならなかった。

タイフーン作戦もまた、当初はドイツ国防軍の目覚ましい勝利をもたらした。ドイツ軍はソ連軍の防御線を突破して最長200キロ前進し、二つの大きな包囲環を形成した。ソ連軍は68万5,000人を超える捕虜を含め、さらに100万の兵力を失った。ソ連の前線には幅480キロにわたる間隙ができ、一見すれば、ドイツ軍とモスクワの間に立ちほだかるものは何もなく、ドイツ国防軍が達成できることにもはや限界はないように思えた。また、中東におけるイギリスの地位を脅かすため、11月にはコーカサスを抜けて前進し、1942年にはイランを経由して1,600キロ進撃しイラクへ進入するとの遠大な計画が、引き続き検討中であった¹⁷。

しかしながら、この時点で三つの事象が生じた。第一に、ソ連が44万人の市民を動員してモスクワの手前に防御陣地を構築させ、地元の市民軍や国内治安部隊の数千人をそこに配置した。第二に、自信過剰だったドイツ軍はモスクワの奪取や包囲のため部隊を集中する代わりに、前線を拡大し始めた。そして第三に、雨季が始まったのである。これはロシアでは毎年のことであり、ドイツ人も十分に知っていたはずである。秋の「ラスプティッ

¹⁶ Elizabeth Wagner, ed., *Der Generalquartiermeister: Briefe und Tagebuchaufzeichnungen des Generalquartiermeisters des Heeres, General der Artillerie Eduard Wagner* (Munich: Günter Olzog, 1963), 204.

¹⁷ Percy Ernst Schramm, ed., *Kriegstagebuch des Oberkommandos der Wehrmacht (Wehrmachtführungsstab)* (hereafter OKW KTB) (Herrsching: Manfred Pawlak, 1982), 1:1038-1040.

ツァ(泥濘期)」「直訳すれば「道路のない時期)」と呼ばれ、秋雨で地面一帯が泥沼と化する季節である。ソ連にとっては、問題ではあるが予期していたことであった。他方、ドイツにとっては大惨事となった。補給品は届かず、部隊は移動できず、航空機は飛べなかった。10月半ばには、ドイツ国防軍は身動きが取れなくなっていた。戦闘を再開するには、地面が凍るのを待つより他はなかった。

わずか二週間前の楽観は薄れ始めていた。10月24日、ヴァグナーは次のように記している。「私の意見では、今年中に[この戦争が]終わることはありえず、まだしばらく続くだろう。いかにして終わらせるかは、なお未解決だ(中略)この戦争が依然として続く長く厳しいものになることは、昨年末の時点ですでに明白だった」¹⁸。同日、パウルスは参謀本部代表者の会議で、イラクへの攻撃は翌春まで待たざるを得ないと発表した¹⁹。8月の時点で終結は目前と踏んでいたヒトラー自身も、11月7日にフォン・ブラウヒッチュに対して、ドイツが1941年の内にムルマンスク、ボルガ川、コーカサスの油田などの最も遠い目標地点に到達することはもはや望めないと認めた。実際のところ、この時点でドイツが防勢に転移することも視野に入れて、置かれた現状を厳しく見直していれば有益であったろう。ドイツの勝利が続いていたとはいえ、ソ連が近いうちに降伏するか、または兵力が尽きるような兆候は全くなかった。ドイツ軍の平均的な歩兵師団の戦力は通常の65%に留まり、装甲師団に至っては35%であった。あらゆる種類の補給物資が不足しており、さらに冬が近づいていた。防勢に転移する好機がすでに過ぎ去っていたにしても、それは残る兵力をさらに疲弊させるより理に適っていたかもしれない。

それでも、誰一人完全にあきらめるつもりはなかったようである。陸軍の首脳部は、ソ連軍は疲弊し切っているはずだと確信していた。新たな目標としたのは、ドイツ側の資源を限界ぎりぎりまで吐き出してでも、1942年中にソ連を回復の望みがないほど弱体化させる更なる一撃を加えることであった。ハルダーは特に、現実から乖離していたようである。11月5日、ハルダーは一人の部下に、自分は兵力温存(Erhaltungsgedanken)と最大効果の追求(Wirkungsgedanken)という二つの概念のバランスを取ろうとしていると話した。その二日後、各軍集団および軍の参謀長らに宛てて通知を送り、約一週間以内にオルシャの町で会議を開くことを計画していると知らせた。そして、その関連資料として、今後数週間に達成を目指すべき「最大」と「最小」の進出目標を示す二本の地線を引いた地図を添付した。「最小」の地線は、レニングラードのはるか東の地点から始まって南へ伸び、モスクワの少なくとも250キロ東を通過してドン川沿いのロストフまで続いていた。ハルダーが実際の目

¹⁸ Wagner, *Generalquartiermeister*, 210.

¹⁹ OKW KTB, 1:1072-1073.

標とすべきと考えていた「最大」の地線は、北方および中央区域で東へさらに120キロから145キロ進んだ地点を通り、スターリングラードと南部のマイコーブ油田までを取り込んでいた。ハルダーは11月13日の会議で（配下の参謀には11月23日）に、次のように伝えた。

この戦争は、軍事的成功のレベルから道義的および経済的耐久力のレベルに移行しつつある可能性がある。ただし軍隊の任務は変わらない。すなわち、利用できるあらゆる手段を使い、敵に可能な限り深刻な損害を与えることである。（中略）ロシアの軍事力は、もはやヨーロッパ再建にとって危険ではない。（中略）敵は（中略）まだ壊滅していない。我が軍部隊の奮闘はいくら評価しても足りないほどであるが、それでも我々は敵の完全な壊滅を今年中には達成しないであろう。無限に広がる領土や無尽蔵に補充される兵力を考えれば、我々がその目標を100パーセント達成することはできないのは間違いない。むしろ、それは始めからわかっていた²⁰。

聞いていた者の反応は、衝撃とハルダーに対する落胆であったに違いない。彼自身の参謀も含め、全員がこの考えに反対した。ソ連の兵力が尽きていないことは明らかであり、それに対してドイツ国防軍兵力の損失は合計70万人近くに上っていた。兵員、装備、武器弾薬、補給物資がすべて不足しつつあった。泥濘はようやく凍り始めていたが、寒さでトラックや機関車が損傷し、道路状況の改善もほぼ無意味になった。北方および南方の軍集団の代表者は、即時に前進を中止し、冬に向け防御態勢へ移行したいと訴えた。中央軍集団の将校は、モスクワ占領を試みることはできるが、それ以上は無理だと考えていた。ハルダーはある程度は折れたが、12月半ばまで全軍が攻撃を続け、中央軍集団がモスクワを奪取するよう強く求めた。中央軍集団兵站主任参謀のオットー・エクスタイン大佐が補給状況の不安定さを指摘すると、ハルダーは大佐の背中をぼんと叩き、こう応じた。「君の計算に基づけば、不安になるのも無理はない。だが、[中央軍集団司令官のフェードア・フォン・]ボックができると言うなら、止めるわけにはいくまい。実際のところ、戦争の遂行には多少の運も必要なのだ！」²¹。

その間の11月15日、ドイツ軍は攻撃を再開した。ここでもまた、当初は一部の前進軸に沿って順調に前進した。しかし、戦闘で部隊は消耗し、戦力の限界に近づいていた。12

²⁰ Halder KTB, 3:306 (23 Nov 1941). 強調は原文のまま。オルシャ会議の詳細については次に参照。Earl F. Ziemke, "Franz Halder at Orsha: The German General Staff Seeks a Consensus," *Military Affairs*, Vol. 39, No. 4 (Dec. 1975), 173-176.

²¹ Wagner, *Generalquartiermeister*, 289. このやりとりに関するエクスタイン自身の記録は次に所収。Wagner papers, BArch N 510/27.

月初旬には攻勢が失速した。ドイツ軍は苦境に陥り、もはや前進できなくなった。防御に適した地形を確保してはいなかったし、野戦陣地や寒冷地用の施設も一切構築していなかった。建設資材や冬用の衣類のほか、予備の燃料と弾薬もポーランドの補給処に置かれており、これらを前線に運ぶ手段はなかった。気温が氷点下を大きく下回り、雪が降りだす中、兵士たちはただ生き延びるだけで精一杯で、攻撃の意欲など消え失せていた。

ドイツ国防軍にとってわずかな吉報があったとすれば、ソ連軍も疲弊し、とても攻撃できる態勢ではないという情報であった。それが少なくともドイツ情報部門の評価であったが、実は間違いだったのである。11月24日、ソ連の最高司令部は最新の戦略予備に展開を命じ、その新設師団の多くは歴戦のシベリア人部隊で構成されていた。スターリンは日本にソ連を攻撃する意思がないことを知り、部隊をモスクワ防衛に加入させたのである。これで西方のソ連軍は343個師団および98個独立旅団を数え、総兵力は400万人を超えた。最も正確な推計によれば、ソ連軍は9月末以降だけで200万以上の兵力を失っていた。それにもかかわらず、ドイツ国防軍を相手に戦ってついに膠着状態をもたらし、今や形勢を逆転しようとしていたのである。

ここで、この戦役における人道上および戦略上で極めて重要な要素に立ち戻っておきたい。それは、ドイツのソ連に対する残虐行為である。ソ連邦内には、地元住民がドイツ人を過酷なスターリン体制からの解放者として歓迎した地域があった。ところが蓋を開けてみると、ドイツ人はそれ以上に残忍だったのである。この戦役は容易に勝利できると確信し、少なくとも公式には、地元住民は劣等な存在であって、そのニーズは二の次だと考えていたドイツ人にとって、譲歩する理由など何もなかった。バルト三国やウクライナの人々など、一部の人口集団を領土計画の手先として使おうとしたことはあったが、そうした住民は相応の自治権を一切与えられず、ドイツ人の気まぐれに生死を左右された。ロシア人となれば、その生存はさらに不確実であった。ドイツ人はロシア人を労働力としてしか見ておらず、それだけの有用性があっても、食料や住居、冬用の衣類でさえ没収されない保証はなかった。ユダヤ人、共産主義者、パルチザンと疑われるものやその支持者、障害者らは、親衛隊の殺害部隊や警察大隊、憲兵、正規軍部隊による処刑の対象となった。捕虜は、ユダヤ人や共産党員だとして銃殺されなかった者も、膨大な人数が飢えや寒さ、病気、虐待、心身の消耗により命を落とした。1942年春には、ソ連市民の死者数はすでに数百万人に及んでいた。このような残虐行為は、戦役の開始前に各部隊に発せられた命令に完全に従ったものであり、1941年の晩秋にはすべての軍集団と軍司令部が、この命令をさらに強化する

新たな命令を発した²²。ソ連が当初、露骨な侵略行為と認識した戦争は、やがて絶対的な征服と大量虐殺のための戦争であることが明らかになった。戦略的には、これはナチスとソビエトの戦いが、妥協や寛容は一切存在しない「全面戦争」へと近づくことを意味した。ナチスのイデオロギーとドイツ国防軍による「軍事的必要性」の認識は、ソ連が生存のための戦争と正しく認識したような紛争を生み出したのである。

ドイツ軍の攻勢が行き詰まった数日後、二つの重大な展開が生じた。一つは、ソ連軍が反攻を開始したことである。選ばれた攻撃地点に兵員数にしてドイツ軍の二倍の兵力と、二倍までは行かないがやはり優勢な砲兵とほぼ同等の戦車を、敵方に何の疑いも抱かせないまま集中させた²³。ソ連軍部隊の多くも、それまで数週間続いた戦闘でまだかなり弱体化していたが、ドイツ軍を激しく攻め、後方まで突破して司令部を攻撃し、補給線の遮断に成功することも少なくなかった。何日も過ぎてからようやく、ドイツ統帥部は事態の深刻さに気づいた。ハルダーの日記からは、反攻開始から数日間は特別な切迫感は一切読み取れない。12月8日、ヒトラーは陸軍に防勢転移を命じた。それを受けてフォン・ブラウヒッチュは、中央軍集団に「対モスクワ作戦の終結後」に防勢作戦に移行するための態勢を整えるよう指示する詳細な命令を策定した²⁴。フォン・ブラウヒッチュが何をもって「終結」と考えていたのかは知る由もない。この命令は、発せられる前の時点で既に意味がなくなっていたからである。ほどなく現実が飲み込めてきたが、もう統帥部にできることはほとんどなかった。大規模な増援部隊が前線に達するまでは何週間もかかる。野戦軍の上級指揮官らは、焦りをあらわにした語調で退却を提案してきた。ドイツ国防軍の前線がソ連軍に包囲され、殲滅されるのではないかと恐れたのである。しかしながら、ヒトラーが指摘した通り、各軍は後方に陣地を一切用意しておらず、燃料や車両、軍馬が極端に不足していたことを考えれば、重火器を撤収する手段はなかった。ヒトラーは一部の局地的な退却は認めたが、それ以外の部隊は現状の位置を固守するよう求めた²⁵。そして、ドイツ軍はかろうじてではあるが持ちこたえた。主としてヒトラーの頑強な意志のおかげと言ってよから

22 Geoffrey P. Megargee, "Vernichtungskrieg: Strategy, Operations, and Genocide in the German Invasion of the Soviet Union, 1941," in the *Acta* of the International Commission on Military History's XXXIV Annual Congress (Commissione Italiana di Storia Militare, 2009).

23 ソ連は早くから欺瞞作戦（ロシア語で「*maskirovka*」と言う）の巧みさにおいて優位に立った。戦争終結まで幾度となく、自軍の戦力や意図に関してドイツ軍を欺くことに成功した。これにより、攻撃地点に大きく優勢な部隊を集結させたり、作戦レベルでの奇襲を仕掛けたりすることが可能になった。

24 OKW KTB I:1078.

25 ソ連の反攻については、次を参照。Glantz, *When Titans Clashed*, 87-94.

う²⁶。スターリンが中央軍集団に対する反攻の範囲を前線全体にまで広げる命令を発したことが、凶らずもドイツ軍を助けることになった。ドイツ軍は確かに弱体化していたが、そこまで弱くはなかった。赤軍がそのすべてを一気に壊滅させることはできなかったのである。ソ連の攻勢は二カ月にわたって続いたが、春の「ラスプティツァ」(雪解け水による泥濘期)が来ると勢いを失った。ドイツ国防軍は後退させられてはいたものの、10月以降に70万人以上の兵力を失ったにもかかわらず、まだソビエトの地に踏みとどまっていた。この間にヒトラーは12月19日に解任されたフォン・ブラウヒッチュを含む、何人もの将官を解任した。これ以後、ヒトラーは自ら陸軍の指揮を執り、次の大仕事への準備を始めた²⁷。

もう一つの重要な展開は、日本による真珠湾攻撃から4日後の12月11日に行われたヒトラーの対米宣戦布告である。ヒトラーは何年も前から、米国との戦争は避けられないと確信していた²⁸。ドイツ海軍が米軍を相手にするには弱体すぎることはわかっていたが、日本と共に戦えば、その点に実際的意味はないと思えた。ドイツ国防軍首脳部の大半も総統と同様に、米国が参戦しても大した違いはないと考えていた(ハルダーは米国の参戦について日記に書き留めてもいない)。ドイツが1942年に東部戦線で勝利できさえすれば、米英両国を永久に阻止するのに必要なあらゆる資源を獲得できるはずであった。それが、国防軍統帥部が12月14日に発した「米国および日本の参戦の意義に関する概観」と題する計画文書の要点であった²⁹。この文書は、日本の参戦により西側連合国の戦略計画は無に帰しており、早くても1942年秋より前に大規模な行動を組織する手段はないと言明している。そして、欧州戦域における行動を想定すれば、北アフリカかノルウェーのいずれかで起きるはずだとしている(実際に、連合軍は11月に北アフリカに侵攻した)。計画立案者らはさらに翌年のドイツ軍の作戦行動に関する予測を行っているが、これについてはさほど明敏ではなかった。ドイツは対ソ戦を成功裏に終結させることができ、その後はヨーロッパロシアの資源を利用して米英両国を永久に阻止できると計画は示唆していた。ヒトラーはこの評価に概ね

26 1941年以降のヒトラーの「固守」命令に関する論争は現在も続いている。多くの元将校や一部の歴史学者は、ヒトラーの融通性のなさや配下の指揮官の判断を信用しない姿勢を批判してきた。一方、この最初の事例においては、その種の命令が中央軍集団の状況を救った可能性を指摘する声もある。しかしその後は、作戦や、時には戦術面にまで及んだヒトラーの介入は、配下の将校らが戦後に主張したほど絶対的でも逆効果でもなかったとしても、それほど有益ではなかったであろう。

27 次を参照。Megargee, *Inside Hitler's High Command*, 160-161, 172.

28 ヒトラーの対米目標の詳細な検証については、次を参照。Norman J.W. Goda, *Tomorrow the World: Hitler, Northwest Africa, and the Path toward America* (College Station: Texas A&M University Press, 1998)。また、次も参照。Adam Tooze, *Wages of Destruction: The Making and Breaking of the Nazi Economy* (New York: Viking, 2007), 503-505.

29 Wfst/L (I K Op) Nr. 44 2173/41 g.K.Chefs., 14.12.41: Überblick über die Bedeutung des Kriegseintritts der U.S.A. und Japans, in BArch RM 7/258.

同意したものの、ソ連南部に注力することに決めた（そうすればスターリングラードへ達することができる）。米国をいかに打倒するかについては、日本に代わりにやってもらうこと以外に思いつかなかったため、それを公に表明することなく、長期的な大陸防衛戦略を決定したのである。1942年の戦略の成功は、1941年の戦略もそうであったように、ソ連を打倒できるかどうかにかかっていた。

ドイツは楽観に満ちて1941年の作戦行動を開始した。宿敵フランスを打ち破り、英国を大陸から撃退した後のことであり、新たな敵は軍事的にも、政治的にも、人種的にも劣等だと確信していた。間違いなく、ドイツ国防軍に恐れるものは何もなく、すべてが数週間で終わるはずであった。確かに侵攻の最初の数週間は、首脳部の自信を裏付けたかに見えた。ソ連軍は技量に欠け、組織が乱れ、経験も浅く、混乱していた。何十万もの赤軍兵士が殺されるか捕虜になり、広大な領土が前進するドイツ軍に飲み込まれていった。この征服者らを止めることは、とりわけ本人たちの目には不可能と映った。しかし、夏から秋になる頃、状況はやや気がかりなものになり始めた。ドイツ軍が強い場所では勝利したが、どこでも強いとは限らず、次の丘の向こうには必ず新たなソ連軍部隊が待っているように思えた。ドイツ軍の意識は徐々に変わり始めたが、それは部分的でしかなかった。一度の作戦でソ連の抵抗力を叩き潰すことはできないという見方に口先だけで同調し、「そんなことは初めからわかっていた」とうそぶいた。そして、イランとイラクへの前進を続ける計画を不本意ながら撤回した。しかし、それでもなお、もう一撃を加えずにはいられぬ衝動があった。確かに自軍の部隊はひどい状態で、寒さが増しつつあるし、補給物資も届かない。だが、ソ連軍も崩壊しかけているはずだ。今こそドイツ兵士の優越性を証明し、勝利への意志を示すときだ、と。そして、戦争中最悪の危機の最中、ドイツ軍将軍らはついに、1941年の計画は失敗に終わったことを受け入れる他なくなった——今年だめでも、来年があると自らに言い聞かせながら。結局のところ、ドイツは最終的な勝利を信じ続けることで、戦争の長期化に対応したのであった。

これを最も的確な言葉で要約したのは、フランツ・ハルダーである。1951年に元部下の一人に宛てた手紙に、彼はこう記している。「戦争は、あきらめたときにだけ負けるのだ」³⁰。

30 ギュンター・ブルームントリット宛て1951年8月6日付書簡。以下に所収。Halder papers, BArch N 220/8. Transl. Geoffrey P. Megargee.

